自然とともにありのままに
―帰るべき場所に戻ってきて

松村直美（湯久保在住）

息子と一緒に。後方の山の中腹あたりが湯久保。

◆遊びに行くのも大変

私は檜原村小沢で生まれ、2歳のときに湯久保に移住しました。子どもの頃は、湯久保に住んでいることは私にとってコンプレックスでした。山の上なので遊びに行くのも大変だし、冬は寒いし、近くにお店はないし、不便なことばかりです。田舎だと馬鹿にされることもありました。

中学時代にドイツへ渡り、日本とは全く違う文化を目の当たりにしました。ドイツでの暮らしは楽しく快適で、帰国してもいつかまたドイツに住みたいと思うようになりました。大学卒業後、念願のドイツ生活を送りました。そして、ドイツで暮らしてわかったことは、ここでは自分は外国人なんだ、ということでした。海外に出ることで逆に自分が日本人であることを意識し、同時に日本に帰りたいと思ったのです。

◆自分の帰るべき場所

帰国後は都心での仕事を見つけ、都心で暮らしました。希望に溢れていて、生活は充実していました。しかし、満員電車に揺られて通勤し、コンクリートでかためられた街を歩き、排気ガスでいっぱいの風に吹かれていると、次第に息が詰まるのを感じるようになりました。そんなとき、湯久保に帰ってくるとホッとして、ここが本当に自分の帰るべき場所なんだな、と感じました。2年前に結婚し、今後の人生を考えたとき、もう都心には住み続けたくありませんでした。都心で働いていましたが、夫が仕事を辞めたのをきっかけに、夫と共に湯久保に引っ越すことにしました。

◆湯久保の出産

私は昨年秋に出産しました。これから湯久保で子育てをしていくにあたって、より一層湯久保で暮らす意味を実感しています。

以前、湯久保では自宅での出産が当たり前で、病院で産むのは特別だったそうです。何人も赤ちゃんをとりあげたという近所のおばあちゃんがお産婆さん替わりをしてくれたそうです。妊娠すると、様子をうかがいに来てくれたり、生まれる時には飛んで来て、準備から産中産後のケアまでしてくれたそうです。私が妊娠した時に、近所の方がそんな話を聞かせてくれました。当時は臨月の頃まで山に入り、大きなおなかを抱えながら薪をしょって降りてきたことや、身重といえど畑仕事は欠かせなかったことなど。畑仕事をしていたら産気付いて、家に戻って敷居をまたいだら生まれてしまったという話も聞きました。昔の人は日ごろから山仕事や畑仕事をして身体が丈夫だったので、妊娠中たくさん動いても早産や流産は少なかったそうです。そしてつわりもお産も軽かったようです。

◆暮らしのヒントを共有する

私が普段聞かせてもらうこんなすごい話を友人や仲間にも聞いてもらいたい、共有したいという思いから、今年の4月に湯久保

の自宅で「お山のばあばの子育ての話」というお話会を開きました。湯久保で生まれ育って、結婚・出産・子育てをしたハツエさん、都会から湯久保に移り住んで子育てをした私の母、二人の話を聞いていつもなるほど！と思うことや、すごいなぁと思うことがたくさんあります。そこに暮らしのヒントや子育てのヒントがあり、いつも為になります。ハツエさんは、子育ては自然に任せてやってきた。子どもたちは自然の流れで大きくなった。それでもちゃんと仕事を持って立派にやっている、と言います。お話会に参加してくださった方から、どのように子育てをしたらいいのかと悩むこともあったけれど、子どもは自然に成長する、これでいいんだと思えた、などの感想がありました。

お話会でのひとコマ

◆自然と人間が共に織り成す

6月にはヨガクラスを開きました。梅雨の季節ならではの、しっとりとした自然を感じながら、心安らぐ空間でヨガを楽しみたいと考えたのです。また、子ども連れでも気軽に参加してもらいたいと思い、「預け合いヨガ」としました。実際には預け合いをするほどの人数が集まらず、子どもを傍らにヨガをしたのですが、それがまた何とも心地良い時間になりました。ヨガの先生は、子どもたちは静かにさせられているのではなく自然と落ち着いていて、大人たちがヨガに集中できる空間は初めて、と驚いていました。湯久保の空間がそうさせたのではないかと思います。

町で暮らしていると、湯久保のような暮らしに触れる機会や自然を身近に感じる機会はなかなかないと思いますが、きっとこうした時間を持ちたいと思ってくれる人はたくさんいると思います。そういう機会を作っていけるよう、自分が子育てをしながら楽しめるイベントを、これからもここ湯久保で企画していきたいと思っています。

ヨガ。子どもと一緒に。

◆人間らしさを失わないように

都心だと、足りないものは夜中でも簡単に手に入ります。飲食店も明け方まで営業し、夜は暗くなることはありません。電車は網目のように走っています。そんな便利な暮らしは悪くはないけれど、引き換えに人間らしさを失う部分もあると思います。湯久保は、都心のようになんでも簡単に手に入るようなことはありません。冬は寒いし、水は凍るし、相変わらず不便です。ここでの暮らしは常に自然に左右されます。けれども、湯久保の人たちはそんな自然に寄り添って暮らしています。それはなんて人間らしい営みなのだろう、と私は思いました。私も出来る限り自然に寄り添って、自然とともにありのまま生きていきたいと思います。そう思えるようになったのは大人になってからですが、子どもの頃に湯久保で暮らした経験があるからこそ、今そのように感じることができるのだと思います。

（まつむら・なおみ＝79年5月10日生まれ。檜原村小沢で生まれ、2歳から湯久保に移住。3度にわたり渡独。計7年半ドイツで暮らす。09年9月に結婚し、11年1月に湯久保へ引っ越す。同年秋に長男を出産。湯久保で子育て中。）